

独立

INTERNATIONAL
DOHURITSU note

ノート

No.

2

2012

年刊 一第80回独立展記念一

独立ノート 第2号

- ターニングポイント【奥谷博】
- このひとに聞く
- つぶやき生の声！
- 留学体験記
- 独立展・あのことろ【中山巍】
- 地方展の活動から

独立展80

2012年

第80回記念独立展





独立美術協会小史

【誕生 - 初期】(1930-1959)

1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高島達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。

初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えらる。

第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超越する「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。

この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960-1984)

現在の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985-)

独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。

一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化していった。

独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。

批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。加えてイベント等の収益の一部を「3.11への支援」にあてる等、社会活動にも取り組んでいる。昨年の第79回展は、会員145名、準会員78名、公募者754名(2,078点)うち入選者628名により開催され、美術館入場者数は、24,744人を記録した。今年は記念すべき「第80回展」を迎え、「独立美術協会80年史」を刊行する。

『独立ノート』第2号発刊にあたり

今年で独立美術協会は80周年を迎えた。

創立以来諸先輩は、日本の油画の完成を願い、戦の時も、平和な時代も心血を注ぎ画中に志を求め、絵画の道を真一文字に突き進んで来た。今後我々も又、独立の旗の下に集う皆さんと共に、築き上げられた80年の歴史をさらに積み上げ、大きなうねりとなって我が国の文化のさらなる発展に心し、進取と革新の気性を持ち、共に進んでいかなければならないだろう。

事務所委員 絹谷幸二

《目次》

■独立美術協会小史	表紙裏
■『独立ノート』第2号発刊にあたり 絹谷幸二	1
■私のターニングポイント 奥谷博	2
■このひとに聞く(1) 多見谷恭子	4
■このひとに聞く(2) 大久保宏美	5
■つぶやき生の声!	6
■留学体験記① ベルギー/ブリュッセル 竹下勝雄	8
■留学体験記② スペイン/マドリッド 高橋雅史	9
■独立展・あのこと vol.2 中山巍	10
■地方展の活動から/鹿児島展・福岡展	11
■独立展からのおしらせ	12

協力: 愛知県美術館、大阪市立美術館、京都市美術館、福岡市美術館
制作: 独立編集室・デザイン室 / タイトルネーム: 今井信吾
表紙: 奥谷博「日本(HINOMOTO)―<光明>―」2011年制作 259×194cm 部分

私のターニングポイント 奥谷 博

インタビュー／山本雄三

今回の独立ノート2号のゲストは、現在、高島屋東京店(4/4~4/10)を皮切りに、全国5会場を巡回される『日本-HINOMOTO II』と題した個展を開催されている奥谷博先生にお話を伺うことになりました。



ターニングポイントとなった作品『難とサギ』1964年 100号F

山本：この度は、個展開催中のお忙しい中、お時間を取って頂きましてありがとうございます。先生は、2007年に、パリ・ユネスコ本部で日本人洋画家として個展を初めて開催されるなど、1963年に東京藝術大学の専攻科(現大学院)を修了後、現在でも、このように洋画壇の第一線で制作活動を続けてこられている要因といえますか、ターニングポイントのような事柄をお話して頂ければと思います。

奥谷：う〜ん、ターニングポイントねえ……まず僕はね、独立展に出始めて、けっして順調にきた訳ではないんですよ。周りの友達は、順調だねえって言うけど。独立展に初めて出品して、落選をしてね。それから、毎日新聞で主催していた現代日本美術展という展覧会も、結構若い人達に人気があってね。それにも出したけど、落ちて



Landscape ―＜海＞― 2010年 171.0×484.0cm

ね。落ちるっていうのは、大変なことなんです。目の前が、ぼ〜と暗くなって、気が付いたら夢遊病者のように歩いていたりして。でも、若いうちは、それをバネに変えて行くくらいの力を身に付けないと、その先を乗り越えていくことは出来ないんだよね。僕は、藝大の美術学部4年を卒業したあと、専攻科(現在の大学院)に二年いって、続けてまた二年、計四年専攻科に通った訳ですよ。全部で学生を八年間。それから副手になって落選している訳なんだけど、学生がみんな入選しているから、出席を取る立場の僕としては恥ずかしくてね……悩みましたよ。で、そうやって悩んでいる時に、ちょうど壁画科っていう、年に四ヶ月くらい行う集中講義の授業が出来たんですよ。それで、僕は、学生の時の担任でもあり、当時の主任教授だった林武先生の指示で、壁画科も担当することになったんです。フレスコとモザイクの二つを、先輩の林敬二さんと二人で。で、最初は、まだ教室がなくて、建築科の地下の部屋を借りて制作することに。川砂をきれいに洗っては、石灰と半々に混ぜて下地を塗っていくわけじゃない。夏は、蚊に刺されて、冬は寒くてね。「牢獄みたいだなあ」なんて冗談言いがらやっていた訳ですよ。油絵を描きたいのに、なんでフレスコとかモザイクをやらなきゃいけないんだろうって。凄く嫌だったんですよ……正直なところ。でもね、あとで考えると、その経験が藝大に通って、僕が一番意味のあったことだったんです。何故、そこに意味があったかというね。イタリア給費留学生で林敬二さんがイタリアに行かれて、斉藤研さんが入ってきたんだよね。それで、当時、林武先生の下に、島村三七雄先生という独立の事務所もやっていた面倒見のいい先生がいらっして。その先生が、ある日、僕に「奥谷君、フレスコっていうのはどうやって描くのか、ちょっと学生の参考までに描いて見せてくれないか」って言われてね。それで、教室で参考になる作品を探していると、パオロ・ウッチェロという作家の図版(サン・ロマーロの戦い)が目に残ったんだ。印刷が良かったということもあったんだけど、何か惹かれるものがあったんだらうね。それがね、壁一面に700か800号位の大きさになっただろう。フレスコって、紙に線香で穴を開けて顔料を塗って線描で転写してから壁に絵具を浸み込ませてい

く技法だから……僕なんかは、手が遅くてね。一日に10センチか15センチしか進まなかった。完成までに、約一年半かかった。余りやりたくなかったというか、嫌々やっていたところもあったりしてね(笑)そのウッチェロの作品は「サン・ロマーロの戦い」といって、今はロンドンのナショナルギャラリーと、ウフィッツ美術館、ルーブル美術館に分かれて所蔵されているんだよ。独立展に入選と落選を繰り返していたその頃の僕の作品は、厚塗りだね、絵具を2センチくらい盛っていた。だから、50号位の作品でも重くてね。マツダとか、クサカベで出している缶の絵具を5色くらい買ってきては、塗って削ってを繰り返しながら1日で使いきってしまうようなね。そんな時、色も鮮明で形もはっきりしているウッチェロの模写をしながら、ふっと何かを感じたんだろうね。「こんなに絵具を盛っていることに意味があるのか……」って。

それから、自分の作品に疑問を持ち始めた僕は、副手の立場を利用しては、入試用のモチーフであるフクロウとかサギ、ギリシャの壺とかを借りてきて、じっくり、徹底的に見て追及して、描いて……1年くらいをかけて2点描いたんですよ。それを、独立展に出すんだけど、出す前に、独立の当時の運営委員のそうそうたる先生方(中間冊夫、山本正、中村節也等)に見て頂くことになって。後で考えると、島村先生が、独立の事務所を任されていた関係もあって、連れて来てくれたんだと思うよ。「藝大の副手をやっていて、独立展に落選して、税が上がらなくて落ち込んでいるのがいるんだけど、見てくれないか」とでも言ってね。30畳くらいの研究室に独立の会員の先生達12〜3人くらいだったかな。僕は、まだ受賞もしたことがなければ、入選と落選を繰り返している立場だったし、肩身が狭くてね。で、見てもらったんだけど、皆が皆口を揃えて「奥谷君、この方向性は良くないから、厚塗りに戻したらどうか……前の方が良いね」と言われて。戻せと言われても、自分としては、1年を掛けて取り組んできた作品だったものだから、今さら変える訳にもいかないし、そのまま出すつもりで研究室に置いていたんだよね。そんなある日、研究室の横を通りがかった山口薫先生が僕のその絵を見つけて、一緒に歩いていた、当時



海豹遊 2010年 200号F 第78回独立展

の山口薫先生の副手をしていた坂本という僕の同級生に「面白い仕事をしているね。この作品は誰のかね。」と尋ねたらいいんです。それで、調べたら僕の絵だと判ったらしく、お昼を食べて教室に戻ってきたら、坂本が僕に言うんですよ、「山口先生が褒めていたよ」って。僕は嬉しくてね。迷わず、そのまま独立に出品したんです。そして、その頃が一番下の賞だったかな?奨励賞を受賞したんです。僕も若かったから、その結果をどう捉えてよいかわからなくて。そうこうしてるうちに、ある評論家から安井賞というコンクールに推薦されて、独立からも数人が推薦されていました。第7回展だったかな……田口安男さんが、安井賞を受賞した時です。で、その時の審査の内容が、国立近代美術館から出ている近代美術館ニュースというのに掲載されていたね。当初は15人で審査する予定だったのが、そのうちの一人が当日に休んでしまって、14人での投票になったらしく、僕と田口さんが同票になってしまったんです。同票なので議論をして、最終的に田口さんが安井賞で、僕は何事もなく終わったんだけど、僕にとっては、安井賞に推薦されて、出品出来ただけでも大変なことなのに、審査の最後まで残ったものだから、それはもう嬉しくてね。作品の傾向を元に戻した方が良いと言っていた独立の先生方も「やっぱり、あれは良かったんだなあ」という風に、後の評価も変わってきて。今、改めて考えたら、どちらの意見も正しかったんだとは思いうのだけど……。

要するに、人にどうこう言われたからと言って、それを気にして変えたりしては駄目なんだと。自分の作品に対して、今思うことがあれば、その時にしっかりやっておかないと、後々、自分というものが無くなってしまう。そういう作家としての姿勢が確立されかけたのがその頃で、ちょうど28歳だった。僕にとっての最初の大きなターニングポイントだったのかなあ。独立展という公募展に出品していた意味というのが、そこにあったんだと思う。とにかく、若いうちは自分の思ったことを、まずはやってみることだね。人の意見に惑わされないように。

山本：個展開催中にも関わらず、貴重なお時間を割いて頂きまして、ありがとうございました。 [note]



日本(HINOMOTO) ―＜光明＞― 2011年 200号F 第79回独立展

このひとに聞く(1) 多見谷恭子



PROFILE
 1962 石川県に生まれる
 1986 武蔵野美術大学短期大学部 専攻科修了
 (現在・大学造形学部 /1999 年改組転換後)
 " 第 54 回 独立展 初出品 (以降毎年)
 1993 個展 /銀座スルガ台画廊 (96、98、00)
 1997 BALLOTS 二人展 /ギャラリー 4GATS
 " 第 65 回 独立展 新人賞受賞
 1998 第 66 回 独立展 独立賞受賞
 1999 第 33 回文化庁現代美術選抜展
 " 第 67 回 独立展 会員推薦
 2001 安田火災美術財団選抜奨励展 秀作賞受賞
 2002 個展 /紀伊国屋画廊
 2003 EVOLUTION16 /高島屋 (以降毎年)
 2005 日韓現代美術特別展 /福岡アジア美術館
 2010 輝け - 独立美術 /三越 (11、12)
 2011 独立美術と神田日勝 - 讃 /神田日勝美術館
 その他 グループ展多数

1. 美術を志したきっかけは？



街まで 162x162cm 1992 年 第 60 回独立展

中学生の時、一生大好きな絵を描いて生きてゆくのだと勝手に思い込んでしまい、一年間、毎晩のように両親と激しくぶつかった末、根負けした父により家庭内勘当となりましたが、美大受験を許してもらいました。きっかけといえるような明確な何かは思い当たりません。とにかく、絵を描くことで身をたててゆく術を模索していたのでしょう。思い込みの激しさだけは人一倍でした。

2. 独立展に出品した理由、メリットは？

学生の頃は公募展に出品するつもりは正直ありませんでした。しかし、高校の美術部の先輩が独立展に入選し、初めて都美術館の展示をみて打ちのめされ、このなかに自分の作品も置いてもらえたら・・・と考えるようになりました。美大を出てしまうと制作し続けることの困難さにたじろぎますが、公募展に出品すれば社会からもある程度認知されますし、比較的スムーズに美術活動ができるのではないのでしょうか。でも、今つくづく感じる一番のメリットは、一生つきあえる仲間と尊敬できる先輩にたくさん出会えたことです。あまりにも無知で頑迷だった若い頃の私にとってそれは何よりも必要なものだったと思います。

3. 大学を卒業してから現在までどのような変化がありましたか？

六畳ほどのスペースがあればどこでも描けるので、制作環境はそれ程変化していませんが、作品は個展をするよ

うになってからどんどん変わってきました。特に十五年前、雷にうたれたように或るイメージが降ってきて、実は自分では不本意だったのですが、描かざるを得なくなりました。それが、現在の作品に繋がっています。経済面では賞を戴けるようになった頃から、いろいろな先輩方の代講などを勤めるようになり、カルチャースクールから講座の依頼が入るようになりました。最近では、たまにですが、作品も売れるようになり、何とか自立できています。

4. 影響された作品、作家はいますか？

学生時代からずっと好きなのはフランシス・ベーコンとフリーダ・カーロ、ギュスターブ・モロー。その他、古代の芸術や思想はどこのものでも興味がありました。卒業後は、ピエロ・デラ・フランチェスカ、タピエス、ラインハルト・サビエ。最近では、あらためてターナーと長谷川等伯にも心惹かれています。

5. 将来像、今後の希望等を聞かせて下さい。

絵を描いて生きてゆくということには固執した私ですがそれ以外の希望は特になく気がします。制作ですべてを昇華してしまうのでしょうか。ただ、納得の行く制作がしたいということだけです。それでもなんとかなしに、これからやらなければいけないかなと思っていることならあるのですが、それでいいでしょうか。今までにたくさんの先生方と出会い、既に鬼籍に入られた方からも、数え切れないほど珠玉のような言葉を戴いてきました。いえ、あまりにもものを知らない年若い出品者で、先生方は驚き呆れたのでしょうか。将来できることがあるとするなら、託された言葉の数々を次の方に渡してゆくことかなと感じています。

取材：花澤洋太 [note]



血と膏 162x130cm 2010 年

このひとに聞く(2) 大久保宏美



PROFILE
 1963 横浜に生まれる
 1986 武蔵野美術大学短期大学専攻科修了
 修了制作優秀賞受賞
 " 第 54 回独立展出品 (以後毎年)
 1994 第 62 回独立展 賞候補
 1997 第 65 回独立展 新人賞受賞
 2000 第 68 回独立展 奨励賞受賞
 " 現代日本美術展 新潟市美術館賞受賞
 2002 第 70 回独立展 奨励賞受賞
 " 朝日チュールリッ展 大賞受賞
 2003 第 71 回独立展 奨励賞受賞
 2005 第 73 回独立展 奨励賞受賞
 2006 第 74 回独立展 中山賞受賞
 2007 第 75 回独立展 独立賞受賞
 2008 第 76 回独立展 会員推挙
 " 損保ジャパン美術財団選抜奨励展
 " 神奈川県女流展 神奈川県立近代美術館賞受賞

1. 美術を志したきっかけは？

高校受験に失敗し、勉強に挫折した逃げ道として美大受験を選んだのが、まさに人生の分岐点でした。子供の頃から絵画に触れる環境にあったことと、絵を描くのは好きで褒められたりしていましたが、そのまま成り行きでここまで来ました。

2. 独立展に出品した理由、メリットは？

大学の尊敬する教授お二人が独立会員だったので、考えもせず比較も選択もせず卒業の年に独立展に出品してみました。落選しましたが、教授に黙って出したことに「かつこつけるな」と言われ「作品は悪くなかった、80 号じゃ小さいよ」という励ましに次の年は 100 号を描いて初入選しました。落選した作品もちゃんと見ていただいていたということが、その後も続けてこられた大きな支えになっています。

3. 大学を卒業してから現在までどのような変化がありましたか？



時の感触 162x162cm 1986 年 第 54 回独立展

なんとなく就職もせずに人伝に紹介されたコンピュータ関係のデザインの仕事を、形や場所を変えながらも、今も続けています。デザインの仕事は、経済的な側面と、絵画制作からの僅かな逃避としての位置づけとして、日々バランスを取っています。

2000 年に父が亡くなり 13 回忌を迎えました。定年後から亡くなるまでは絵一筋に活動していましたが、告別式の友人弔辞で「今は娘さんが絵描きの道を継いでおられ

ます」と挨拶があり、「そうか、絵描きを継いでいるのか」と人に言われそこで気持ち改めて行く道を覚悟した次第です。父が亡くなったことよりびっくりしたことがありました。それは、大学同期の親友と一緒に新人賞をいただいた多見谷さんが、翌々年に会員に推挙されたことです。先陣を切ってくれたことで、このあとに続いてゆける希望を与えてもらいました。

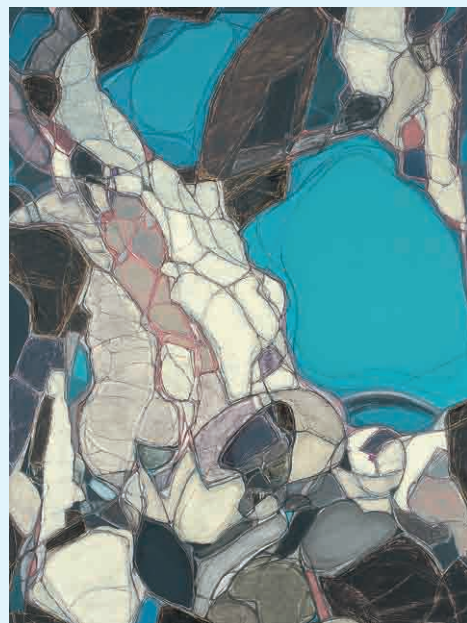
4. 影響された作品、作家はいますか？

学生時代に「野見山曉治に似ている」などと言われ、イイ気になって意識していました。有元利夫の卒業制作 10 点連作 (縄跳びの少女) に衝撃を受け、この作品のキワの処理が今でも異常に好きです。昨年の庭園美術館の展覧会にその作品だけ出展されていず、抗議したほどです。制作に行き詰まった時は、マティスとベーコンとシーレの画集を見ます。

5. 将来像、今後の希望等を聞かせて下さい。

やめようと思ったことや、やめなければいけない境地に立たされたことが、無いという自分は幸いです。絵を描く、絵を観る、絵について話す、なんと贅沢な時間が与えられているのでしょう。同じ目的で集まる場所があることと、その一員としての誇りを持ち続けたいと思います。謙虚な姿勢、感謝の気持ち、照れと愛嬌、この猛暑の連夜オリンピック団体競技観戦から学んだことを、今後の教えにしようと思っている今日この頃です。

取材：花澤洋太 [note]



ペーパーミントラビー 259x194cm 2011 年 第 79 回独立展

留学体験記① 独立美術協会会員 竹下勝雄

■渡航先

ベルギー / ブリュッセル

■きっかけ

私の学生時代は、バブル期の好景気に支えられて海外から様々な情報が押し寄せていた。海外の人気アーティストを取り上げた展覧会も各地で開催され、“現代美術”活況の様相を呈していた。当時、通い詰めた美術書専門店にも外国人アーティストの作品集が数多く並び、そこで目に留まった画集の多くが、ベルギー人作家が制作したドローイングや彫刻作品だったので、次第にこの国のアート・シーンに興味を抱くようになった。

■出発までの準備段階



ベルギーのシンボル・小便小僧 田舎町「アン」路地裏の井戸ポンプ

渡航準備として、まず現地受入機関の情報収集から始めたのだが、当時はまだインターネットや電子メールが普及していなかった上に、情報公開が進んでなかったため、現地とのやり取りは書簡に頼らざるを得ず、学校案内やビザ申請用の「仮受入許可証」（試験に合格した場合に入学を許可）入手に大変時間がかかった。加えて、在日公館でのビザ申請（仮ビザ）の提出書類が多かったため、その手続きにも奔走した記憶がある。

■行ってから困った点

現地警察が窓口となっている滞在許可証取得の手続き。

当時、欧州では外国人移民の不法就労が深刻な社会問題であったので、滞在許可証取得の手続きは留学目的であっても容易ではなかった。また、ベルギーは四国の1.5倍程度の国土の中で、ワロン地域政府（フランス語圏）とフランダース政府（オランダ語圏）、更にブリュッセル首都圏地域政府（2言語併用地域）の3つの政府があり、しばしば言語対立が話題に上る。現地に滞在するとその根深さや複雑さを日常生活の中で体験することとなり、たとえ外国人であっても、現地に溶け込むためには中立の立場で接するように配慮した。



■収穫、得たもの

個人的な印象として、現地のギャラリーは、それぞれ特定のジャンルをオーナーがこだわって専門的、長期的に取り扱うため、ダイナミックな企画展示を堪能できる。また現地の美術大学は、進級・卒業審査時に他大学の教授や作家、評論家、ギャラリー関係者が審査員として参加するのが一般的で、その折に知り合ったギャラリー関係者の企画で個展やグループ展を開催することができ、かつ様々な国籍の作家等と交流を結ぶことができた。帰国後、20年経た現在も欧州で発表活動を継続しながら、教員養成系大学での美術教育の海外学術調査研究に役立っている。

■後進へのアドバイス



ベルギー王立美術館より眼下にグラン・プラス

不況を乗り越えて、自分を信じて目標に向けて地道に取り組んでほしい。昨年の文化庁派遣で指導に携わったブリュッセル市内の芸術系大学では、中国や韓国からの留学生が目についた。ベルギーで毎年開催される学生のコンクール（国内の芸術系大学選抜展）でも、彼らが華々しい活躍をしていたのが印象的だった。20年前と比べて日本人留学生の数が減少し、代わってアジアからの留学生が欧州を熱くしている。日本国内には、留学を含む海外での活動に関心のある若手芸術家を支援する様々な財団や各国政府主催の留学生試験もあるので、大いに挑戦してほしい。

今の時代は、自宅に居ながらにして世界中の情報を瞬時に得ることができる。しかし、日本のルールが通用しない海外生活では、何が起きるかわからない。ものの考え方や習慣の異なる社会に身を置くと、思い通りに行かないことや不条理なことは日常茶飯事である。ひとつの事を成し遂げるために費やしていた時間や行程、人と人との関わりが省かれる今日、いったい人間はどのようにして日々の営みに達成感やリアリティを覚えるのだろうか。労を惜まず、好奇心を持って、自分の目や自分の足でチャンスを掴んでほしい。

取材：高澤哲明 [note]

ブリュッセルの中心地グラン・プラス。見る人を圧倒する歴史的建造物

留学体験記② 独立美術協会会員 高橋雅史

■渡航先

スペイン
マドリッド

■滞在期間

2009年11月～
2010年10月



アントワープにて

■受入先

アカデミア・デル・ディプホ・デ・ペーニャで申請したのですが、スペインの学生ビザ取得に関する規定が直前に変わってしまったため、語学学校を取りあえずのビザ取得用の指定校にしました。何ヶ月過分の月謝を納入する事になりましたが、お陰様で、いくらスペイン語についての勉強が出来ました。とにかくスペインというのは困った国でコロナ法律が変わるみたいです。前もってペーニャを見学に行った時に知りあった留学生の方がいろいろ助けて下さったので、ビザが発行されるまでも不思議と不安はありませんでした。



コンプルテンセ大学の解剖学の講義。壁面には古くからの優秀作品

■きっかけ

留学する事になった直接のきっかけはやはりいろんな方からの影響でマドリッドで古くからある方法論を直接スペイン人にスペイン語で習いたかったからというのが一番の理由です。

どういう訳か私は運が良いみたいでピソ（マンション）を探す前に滞在していたオスタル（ホテル）のオーナーの婿養子が日本人、更にそのオスタルから300mくらいのところに日本人の方が所有しているピソを学校の秘書の方から紹介され、何だか気のいいおばちゃんがオーナーだったので意気投合したら、実は故磯江毅氏の親友でみたい

な感じでシルクロ（公宮のアトリエ）や学校からもとても近く、古い建物でしたがエアコンなしでも十分に涼しく最高でした。

…ただ、直接下の階がディスコだったんですね…しかもその隣はタブラオといってフラメンコを見せるところだったんですね…向かいもディスコでその隣はゲイバーで…夜の3時までは営業してるんですね…それが終わったら道路に出て歌い出すんですね…それはそれはえらいことでした。スペインではシエスタの習慣がまだ色濃く残っているので睡眠不足になるという事はありませんでしたが、帰国してから生活のリズムを整えるのがかなり大変でした。また、住居自体もかなり古く、シャワー中に下水管が破れ、下のディスコが水浸しになったといった事もあったのですが、オーナーのご主人がスペイン人でしたので、修理の手配などいろいろ助けて頂きました。

■収穫、得たもの

現地での収穫は出発前に想像していたよりもかなり大きなものでありました。滞在中にまたまアントニオ・ロベスの制作現場をリアルタイムで見れたり基底材研究で紙についてヨーロッパでの紙の起源を探りに行ったり技術的に多くの発見がありました。

そして何よりマドリッドにおける制作活動を通して1枚の絵をどこまで深く感じそれを表現していくかという当たり前の事を再認識させられました。同時に自分の作画姿勢、ものを描くという事についての未熟さを痛感しました。

■後進へのアドバイス

もし留学を希望されるのであれば、当たり前ですが必ず現地に何度か足を運び、滞在希望先に知り合いや直接動いてくれる方と知りあっておくことビザ関係の法律が変わった時など対応してくれて大変心強いです。目的意識をしっかり持ち、全ての時間を楽しみつつもりで過ごされる事をお勧めします。

取材：高澤哲明 [note]



ペドロ・マルティネス教授の実際に描きながらの講義。筋肉を解説

独立展・あのころ vol.2

～独立展分裂危機のころ・「新しい美術協会」中山 巍～

塚本 聡

かつて静かな中にも理知的な空間構成と、大胆な筆致による都雅な感覚で、独自の作風を展開した画家がいた。「中山 白」とでもいうべきその不思議な白は、東洋的な空間を感じさせ、やがてその白は光の中へ収束していった。

中山 巍（1893-1978）岡山県生まれ。1911 年、葵橋洋画研究所に学び、1920 年、東京美術学校卒業。藤島武二に師事。1922 年から1928 年まで滞欧、ブラマンクに師事。写実的表現からフォーヴィスム、シュルレアリスムに接近した。帰国後、二科賞を受賞。1930 年協会会員。1930 年、二科会会友を辞し、里見勝蔵らと独立美術協会を結成。女子美術大学教授となる。日本芸術院賞受賞。1949 年 岡山県立美術館蔵



『パレットを持つ自画像』部分

■中山巍（たかし）は、岡山市長でプロテスタントの父、寛の4男に生まれた。19歳で亡くなった次兄が残した多くの水彩画を見て幼児期を過ごし、小学3・4年生の頃から水彩画を描き始める。中学生になり、奈良や鎌倉で開かれた水彩画夏期講習会に参加。画家になる決意をする。

■葵橋洋画研究所と東京美術学校（注1）の頃、鈴木亜夫、里見勝蔵、前田寛治、佐伯祐三らと出会う。後にパリで再会し、結婚の世話もしてもらった同県人の画家・児島虎次郎（注2）と出会う。〈虎次郎は明治神宮絵画館の壁画制作による疲労のため47歳で逝去した〉

■船旅で渡仏して来た前田を迎えに行くが、船上で陽に焼けて真っ黒の彼に中山は気付かなかった。帰国後の前田の本には「初め君を見つけた時印度人かと思ったので」と言った中山のことが書かれている。

■中山は、パリのロルヌ街32番地に、広い2階建て一軒家を借りた。ここへは里見、前田、佐伯、小島善太郎らも集い、夜更けまで盛り上がった。この頃、帰国後には「新しい美術家協会」を作ろうと話し合った。やがて高島達四郎と福沢一郎が、この32番地にアトリエを移して来て親交を深めた。

■パリ南西の市外地クラマールに、中山が3ヶ月の前払い後、放置していた貸間があった。そのことを話すと、先ず小島、次に隣へ佐伯一家、さらに川口軌外一家がそこに越して来た。週末には中山や里見、前田も集まって賑やか



『ヴィオロニスト』1926年
130.5 × 89.0cm 岡山県立美術館蔵



『洋文字のある静物』1966年
100.0 × 80.3cm 岡山県立美術館蔵

だった。佐伯が妻や娘と越して来た日、家族全員が「化け猫」の夢を見て小島の部屋に逃げ込んだ。

■帰国後、パリで熱情をもって語り合った「新しい美術家協会」である、1930年協会の会員となった。しかし佐伯に次いで、中山の最も親しい友人であった前田を亡くし、この会は新たに独立美術協会へと移行する。生前の前田は、後は中山に絵を見て貰うようにと弟子に言い遺した。

■結婚し、現・大田区馬込に居を移す。その階下で、同志等と話し合いを重ねて独立美術協会を創立する。協会活動の一環として、数箇所の研究所等で指導する。会員中最も多くの弟子を持ち、独立の中核となる。



『鳥を飼う室内』1964年 91.0 × 116.7cm 岡山県立美術館蔵

■4回展終了後、絵画理念や運営上の意見の違いで、独立展の中に対立が起こる。中山は收拾に奔走し、坂崎坦（当時・朝日新聞芸芸部長）の協力を得て結束させた。しかしその3年後、里見ら6会員が去る。5年後には、中山が仲人をした福沢も去って行く。

■戦時中は、藤田嗣治、小磯良平らと従軍画家として東南アジアを歴訪。戦後、57歳の時「マチス礼賛」により、在野で初めての日本芸術院賞を受賞する。

■66歳の夏、脳出血により左半身不随となる。数ヵ月後、妻に支えられて小さな絵「イバラの冠」を描く。4 × 10mの壁画制作の依頼があり、自宅の庭を潰し巨大なアトリエを建て、リフトに乗り終日制作した。こうして79歳で、金地と白地に鼓笛隊の乙女達が躍動する「建設の讃」を完成させた。

■坂崎坦が1月に90歳で没した年の5月、娘に「やりたい事は全部やって思い残すことはない」、妻には「有難う有難う」と言い、中山は85歳の生涯を閉じる。その翌年から、独立展の『中山賞』として若い画家達を鼓吹して来た。中山巍の「新しい美術家協会」への熱い思いは、80回を迎える独立美術協会の中にも連綿と引き継がれている。 [note]

（注1）：現・東京芸術大学。

（注2）：大原孫三郎の依頼で、渡欧して美術品を収集し、倉敷の大原美術館の基礎を作った。

主要参考文献：

・中山巍回顧展図録「中山巍について」略年譜 高倉達夫。

『初秋の日に』中山茂子 富士美術館 昭和54年。

・寫實の要件「中山巍君」前田寛治著 中央公論美術出版 平成11年。

・みつゑ619号 特集：佐伯祐三「佐伯祐三の回顧」小島善太郎 1957年。その他。

地方展の活動から

★「独立展」は六本木だけじゃない!!★

大泉佳広

じつは、独立展を見ることができるのは、秋の国立新美術館だけではなかったのです!独立展は、全国規模の公募団体展として全国各地で巡回されていたのです。特に、



桜島

昨年（第79回）展は九州だけでも鹿児島と福岡の2か所（注）で独立展を見ることができたのです。みなさん知っていましたか?え!?知ってた?知ってて当然?すいません・・・でも、すごい事だと思いませんか?北海道で描かれた作品が九州の美術館で展示される!六本木の都会で展示されていた作品を桜島の近くで見ることができ!さすがに全国規模の独立展!!すごいぞ!!（勝手に熱くなってすいません・・・）

独立展の名の下に全国から結集されたあの熱いエネルギーを肌で感じることができるのは、間違いなく国立新美術館しかありません。それを十分に承知した上であえて小生は言いたい。「独立展はそれだけではない!」と。地方展には地方展特有の良さがあり、その楽しみ方もあるのです。



白クマ

とにかく、情熱ながら三重県生まれの小生が、昨年度の九州の巡回展をレポートしたいと思います。

「最南端の独立展」鹿児島県

鹿児島県は3年に一度の開催なので、毎回「お祭りモード」。「西郷どん（せごどん）」の銅像の近くにある「黎明館」で開催され、会員の作品を中心に、受賞作と地元出品者の作品が展示されます。また、鹿児島は海老原喜之助先生の故郷ということで常設展示では海老原先生の作品も見ることができます。

今回はゴールデンウィークに合わせた開催でしたので、さらに「お祭りモード」全開!ギャラリートーク等のイベントも盛りだくさんで、会期2日目には今井信吾先生、福満正志郎先生方のギャラリートークがありました。その夜は前畑省三先生をはじめ鹿児島・宮崎・熊本の独立メンバーと懇親会があり、やはり鹿児島!焼酎パワーで芸術論が大盛り上がりでした。雄大な桜島を眺めながら昨夜の芸術論と独立展の作品を思い出し「熱いぞ!」

鹿児島!熱いぞ!独立!」という感じの帰路でした。次回、3年後の鹿児島展で南九州の空気の中で見る一味違った独立展をぜひ体験してみてください!

【鹿児島白クマ】

鹿児島の繁華街「天文館」。鹿児島ならではのおいしい物が食べられるお店がいっぱいあります。でも、一番驚いたのが「白クマ」。鹿児島では「かき氷」の事を「白クマ」というのかなと思いきや、もはや別物!大盛りかき氷の中にたくさんのフルーツが埋まっているというか、フルーツ



鹿児島ラーメン



さつま揚げ

の隙間にかき氷が詰めてあるというか、とにかく表現するのが難しい。もはや「白クマ」は「白クマ」としか言いようがないような代物。小生のお勧めは「くろいわ」で鹿児島ラーメンとさつま揚げを食べて暑くなった後、「むじゃき」の白クマで熱を冷ますというコース。ぜひ一度おためしを!でも、なぜ鹿児島で白クマ??

▶次項へ続く

「巡回展のトリ」福岡展

お次は、全国巡回展のトリをつとめる福岡展。博多駅から地下鉄5駅でいける大濠公園内にある「福岡市美術館」で毎年開催されます。福岡展のポイントは「地方展らしくないボリューム（良い意味で!）」。今回も、巡回可能な会員の作品すべてと主だった受賞作品を九州まで運びこみ、これに地元出品者の作品が加わり、ボリュームたっぷりの独立展が味わえました。九州でこれだけの大規模な展示が毎年できるのも、福岡だけではなく山口、佐賀、長崎、熊本の独立メンバーが協力をして「福岡展」を盛り上げているからこそ。実質は「北部九州+山口展」!この団結力には感服です。

福岡は創立会員の児島善三郎先生の故郷ということもあって、「児島善三郎と独立美術協会」が5月の終わりに企画されていたのですが、残念、福岡展と会期がズレている・・・宮崎在住の小生としては片道4時間が・・・うむ・・・九州って意外とでかい・・・でも、常設展で児島先生の作品を見ることができました。福岡展は、その年の独立展を見る最後のチャンス。本展を見逃した人やもう一度見た人は春の福岡に集まれ!

【福岡の夜】

今回は車で移動のため夜遊びができずに残念でしたが、一度は屋台に行かれる事をお勧めします。福岡市美術館と博多駅の間に天神や中洲が「全国の屋台の4



博多ラーメン

割が福岡にある」と言われるほど有名。つつい博多駅に向かう地下鉄を途中下車してしまいそう。「屋台＝（博多）ラーメン or 焼き鳥 or おでん」という勝手な思い込みをしていた3年前の小生は、屋台の種類の多さと各店のメニューの多さに驚きでした。焼きラーメンもお勧めですが、特に珍しかったのが「あご（トビウオ）」の干物。長崎平戸の名物で出汁をとるのによく使うらしいのですが、軽くあぶっても最高!噛りつきながらお酒を一口!美味しゅうございました!でも、悲しい事に今回は車なので屋台は我慢して、本場の博多ラーメンをいただきました。お勧めは「博多だるま」。つつい替え玉しちゃいました。

80 回展の地方展も盛りだくさん

右のページにあるように、今年も独立展は全国で開催されます。地方展の時期に合わせて旅の予定を立てるのもアリかも・・・その地方ならではのもう一つの「独立展」を感じることができるのでは?

[note]

第 80 回独立展の地方展／特別展案内（会期等変更もございます。詳細はHP でご確認ください。）

大阪展

2012年11月13日(火)～11月18日(日)
大阪市立美術館／天王寺区茶臼山1-82



京都展

2012年11月28日(水)～12月9日(月)
京都市美術館／左京区岡崎門勝町124



北海道展

2013年4月3日(水)～4月14日(日)
北海道立近代美術館／中央区北1条西17丁目



独立準会員 + 展

2013年4月2日(火)～4月6日(日)
東京都美術館／台東区上野公園8-36



名古屋展

2013年3月19日(火)～3月24日(日)
愛知県美術館／名古屋市東区東桜1-13-2



小島善太郎記念館

創立会員の小島善太郎は晩年、東京都日野市百草にアトリエを構えました。その『百草画荘』が記念館として、平成25年4月に開館します。



【編集後記】

白熱したロンドンオリンピックも日本が期待以上の成果を上げ、寝不足気味の夏を過ごした方も多くいらしたと思います。そのオリンピックも閉会式が始まるという頃から、編集室メンバーは記事の仕上げに入りました。さて、『80 回独立展記念号』は、如何だったでしょうか?編集室は、今号から仲間が2名増え、9名となりました。デザイン室8名の頼もしい協力も得て、更に充実した紙面を検討して参ります。今後も一致団結で、良い色のメダルが頂けますよう、乞う御期待!

塚本 聡

【独立編集室】

五十里雅子／大泉佳広／高澤哲明／高橋雅史／塚本 聡
花澤洋太／松村浩之／山本雄三／輪島進一

【独立デザイン室】

大久保宏美／大場再生／奥谷太一／金井訓志／中島 明
浜松繁雄／早矢仕素子／廣田政生

[note]

独立展からのオリジナルグッズ

『独立美術協会80年史』発刊!

80 回を記念して「独立美術協会 80 年史」が著名な美術評論家をはじめとする執筆陣により完成しました。この一冊から、輝く独立 80 年の全貌が望めます。ご希望の方は独立事務局までお問い合わせ下さい。



独立オリジナルグッズ

便利でオシャレなグッズを作りました。良い素材を使った逸品です。価格もお求めやすく設定しました。

80 回 記念 T シャツ

(限定 100 枚)

独立展 80 回展を記念した T シャツです。レディース専用もご用意しました。



パワフルTシャツ 2 種

奥谷 博会員の書をデザイン。5.6oz 綿 100% のヘビーウェイト T シャツです。



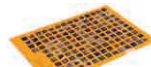
8F キャンバスバッグ

8F が入る便利な特製バッグ。厚地 8 号帆布使用 40x50x7 cm。



クリアファイル

独立会員自画像の記念クリアファイル。



幸せの独立ハンカチ

肌にやさしいスペシャルハンカチ。



携帯拭きストラップ

携帯電話やメガネをスッキリきれいに。



第 80 回記念独立展 (2012 年 10 月 17 日～ 29 日) イベント案内

日	時	内 容	場 所
17 水 	10:00	東日本大震災被災者支援チャリティー展 (21 日抽選)	1 階・休憩室
	18:00	『80 回記念袋』 (会員の愛用品を含む福袋を販売します)	1 階・販売コーナー
17 水	14:00	独立美術協会会員による批評会 (各展示室に於いて)	2 階、3 階それぞれの展示室
	18:00	表彰式・懇親会	東京會館
20 土	14:00 16:00	80 回記念パネルトーク (I) 司会 / 奥谷 博、林 敬二 『独立の 80 年を語る』一独立の底力ー ゲストパネリスト / 宝木範義氏 美術評論家、明星大学特別教授、独立美術協会 80 年史執筆 富山秀男氏 美術評論家、神宮美術館館長、独立美術協会 80 年史執筆 南 宏氏 美術評論家、女子美術大学教授、独立美術協会 80 年史執筆 本江邦夫氏 美術評論家、多摩美術大学教授、独立美術協会 80 年史執筆	1 階・第 1 室
	14:00 16:00	ギャラリートーク (I) 田口貴大、佐々木里加、大塚利典	2 階会場入口
21 日	17:00	チャリティー展抽選	1 階・第 6 室
	14:00 16:00	80 回記念パネルトーク (II) 司会 / 今井信吾、絹谷幸二 『独立展を彩った名作』一独立 80 年を語るー ゲストパネリスト / 酒井忠康氏 美術評論家、世田谷美術館館長、独立美術協会 80 年史執筆 原田 光氏 美術評論家、岩手県立美術館館長、独立美術協会 80 年史執筆 土方明司氏 美術評論家、平塚市美術館館長代理、独立美術協会 80 年史執筆	3 階・講堂
28 日	14:00 16:00	ギャラリートーク (II) 石井武夫、岡田忠明、浜松繁雄	2 階会場入口

※変更の場合もございます。詳細は、独立展のホームページか会場係員にご確認ください。

81th 独立で輝いてみませんか？

独立展

2013/10/16(水)-28(月)

国立新美術館

搬入日:10月3日(木)・4日(金)

詳しくは、独立展のホームページまで！

<http://www.dokuritsuten.com>



独立ノート第 2 号

発行日 / 2012 年 10 月 1 日

発行者 / 独立美術協会

〒 141-0031

東京都品川区西五反田 2-13-8-507

Tel. 03-3490-5881

Fax. 03-6420-0026

E-mail. dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp

URL <http://www.dokuritsuten.com>

印 刷 / 朝日印刷工業株式会社